

OKADA-ROOM Vol.5

OKADA-ROOM 開室1周年記念 館蔵名品選
—日本近代洋画の女性表現—

会期 2016年5月20日(金)～8月28日(日)

OKADA-ROOMではこのたび開室1周年を記念し、女性像をテーマとした展覧会を開催します。岡田三郎助は、日本独自の油彩画を探索するなかで、とりわけ日本女性を重要なテーマとし、その美しさを描き出すことに一貫して心血を注ぎました。明るく豊かな色彩でとらえられた彼女たちは温雅な上品さを湛え、「美人画の岡田」とも呼ばれた岡田三郎助作品の代名詞ともなりました。その女性像の数々は、時代を超え、今なお多くの人の心をとらえてやみません。本展覧会では、岡田の円熟期の傑作《裸婦》、平成28年4月に佐賀県重要文化財に指定された《花野》、また大変珍しい木版画《おさん》など、館収蔵の岡田三郎助の女性像をご紹介します。さらに岡田に関連の深い7人の洋画家、百武兼行、中沢弘光、藤島武二、高木背水、山口亮一、御厨純一、北島浅一による女性像の優品も併せて公開します。

出品目録

1	なかの たつ 像 中野多津像	Portrait of Tatsu Nakano, Okada's Cousin	岡田三郎助	1893 (明治26) 頃	85.0×54.8	油彩・カンヴァス	個人蔵
若き岡田の修業時代の労作							
長崎県・神奈川県 なかの たけ あき の知事を務めた叔父、中野健明の娘を描いた作品。健明は洋画家を志していた若き岡田の良き相談相手であり、彼の家族もまた岡田と親しく付き合ったと考えられる。当時の岡田は画塾で修業中であり、暗緑色の背景に鮮やかな赤い着物が引き立つ画面には筆運びの生硬さが見られるものの、澄ました中にあどけなさの残る少女を縁者ならではの親しみをもって誠実に描き出している。							
2	清楚 (少女)	Graceful Girl	岡田三郎助	1907 (明治40)	43.8×33.5	油彩・カンヴァス	館蔵
小首をかしげた可憐な少女							
カンヴァスの中からこちらをまっすぐに見つめる少女。髪と着物の輪郭はぼかされ、画面中央の少女の顔に視線が誘導されるように工夫されている。かしげた首やわずかに口角の上がつた唇、瞳の中に描き入れられた光が、表情を生き活きと際立たせ、作品全体の甘い魅力を引き立たせている。 当初は《習作 (少女)》というタイトルであり、1907 (明治40) 年の第11回白馬会展に出品された。							
3	婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1909 (明治42)	60.6×50.0	油彩・カンヴァス	館蔵

静謐な魅力を湛えた横顔の女性

岡田41歳の作品。女性の着物と背景の壁はシンプルな濃褐色でまとめられ、暗がりから肌の白さを浮かび上がらせるような効果を与えている。女性の表情も丁寧あざみに描きこまれ、当時の筆の充実ぶりをうかがうことができる。岡田はこの時期、本作や《薊》など、物思いにふけるようなメランコリックな表情の女性像をたびたび描いた。

4	薊 あざみ	Thistles	岡田三郎助	1908（明治41）	60.7×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵
深い緑色の諧調が見どころ 第12回白馬会展への出品作。読書中に物思いにふける情景であろうか。女性の背後にはアザミの葉やキキョウが配され、秋の一こまであることがうかがえる。背景、着物、帯ともに緑色で統一されているが、それぞれ異なる色調に描き分けられており、岡田の色に対する非常に鋭敏な感覚を見て取ることができる。 この時期、岡田は画面一杯を覆う植物の背景と着物をまとった女性の取り合わせを好んで画題とした。							
5	少女読書	Reading Girl	岡田三郎助	1924（大正13）	44.9×33.2	油彩・カンヴァス	館蔵
幸福感に満ちた少女像の優品 うらかな陽光を浴びて読書を楽しむ少女の肖像である。彼女の髪型や洋服は当時のモードである洋装のそれで、現代でいう雑誌のグラビアページのような、新しいタイプの美人画とすることができる。 本作は、背景に描かれた窓の形などから、現在の渋谷区恵比寿にあった岡田のアトリエの前で描かれたと考えられる。							
6	花野	Field of Flowers	岡田三郎助	1917（大正6）	65.2×90.8	油彩・カンヴァス	館蔵 佐賀県重要文化財
師ラファエル・コランへのオマージュ 岡田は生前から、ラファエル・コランに師事した日本人画家の中でもその作風を最もよく受け継いだ画家と評されていた。本作はコラン没後の翌年に描かれたもので、草上に横たわる裸婦を描いたコランの作品《花月（フロリアル）》（パリ・アラス美術館蔵）などが連想される。本作は岡田にとって師コランへ捧げるオマージュであったのかもしれない。第11回文部省美術展覧会に出品。							
7	裸婦	Nude	岡田三郎助	1935（昭和10）	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵 佐賀県重要文化財
円熟期を迎えた岡田晩年の傑作 岡田67歳、1935（昭和10）年の第二部会展に出品された作品。当時の新聞では「今までの帝展よりもつと力瘤ちからこぶを入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かった。展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。							
8	淙々園 そうそうえん にて	At Soso-en	岡田三郎助	1935（昭和10）	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵

涼しげな女性の姿

滞在していた伊豆山の旅館で描かれた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝くろだ せいきの代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。一心に読書にふける姿は、柔和ながら凜とした雰囲気漂わせる。

9	婦人半身像(下絵)	Study of Portrait of a Woman	岡田三郎助	1936(昭和11)	62.2×47.5	パステル・紙	館蔵
---	-----------	------------------------------	-------	------------	-----------	--------	----

力量が遺憾なく発揮された下絵

第1回新文展に出品された《婦人半身像》(東京国立近代美術館蔵)の、パステルで描かれた習作。習作とはいえ、力強い輪郭線で縁取られた女性像は高い完成度を示している。岡田が構想に十分な時間をかけて本制作に移っていたことが分かる。描かれた女性は、晩年の岡田作品にしばしば登場する専属モデルの北村久子。

10	おさん (近松門左衛門作「大経師」より)	Portrait of Osan; an Heroine of Chikamatsu's Joururi Play	岡田三郎助	1922(大正11)	38.8×19.8	木版摺着色	館蔵
----	-------------------------------------	---	-------	------------	-----------	-------	----

大変珍しい岡田の「浮世絵」

1922(大正11)年に出版された『大近松全集』第6巻の付録として岡田が制作したもの。「おさん」とは近松門左衛門の浄瑠璃「大経師」の主人公で、人妻でありながら禁断の愛に身を焦がす女性である。木版画ながら、メランコリックな彼女の表情や指先などの繊細な表現には、やはり美人画の大家と言われた岡田の力量が存分に発揮されている。現在、この作品以外に岡田作の木版画は伝わっておらず、貴重な作例である。

11	西洋婦人像	European Woman	百武兼行	明治時代	50.9×41.1	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-------	----------------	------	------	-----------	----------	----

こちらを見つめる大きな瞳が印象的

ヨーロッパ滞在中に制作された作品。描かれた年代やモデルはよく分かっていないが、百武は1878(明治11)年にフランスでレオン・ボナの門下に入り、飛躍的に人物描写の技術を向上させていることから、彼から学んだ以降の作品と思われる。暗い背景から浮かび上がる人物像やスポットライトを当てたようなドラマティックな光の効果は、レンブラントなどの17世紀オランダ絵画を連想させるが、ボナもまた得意としていた描法である。

百武兼行(ひゃくたけ・かねゆき、1842～1884)

現在の佐賀市片田江に生まれる。1871(明治4)年から鍋島直大(なべしま なおひろ)(第11代佐賀藩主)のヨーロッパ巡遊に随行し油彩画に出会い、ロンドン、パリ、ローマで本格的に学ぶ。本職は外交官であったが、いち早く西洋で油彩画を学んだ日本洋画のパイオニアの一人として知られる。

岡田三郎助は幼い頃に百武の描いた油彩画を見て大きな衝撃を受け、この経験が「子供心にも堅い決心をつけさせる重要な動機」となり、洋画家としての一生を決定づけた、と語っている。

12	婦人肖像	Portrait of a Woman	高木背水	1915(大正4)頃	96.6×71.3	油彩・カンヴァス	館蔵
----	------	---------------------	------	------------	-----------	----------	----

美しく気品ある令嬢の肖像

紙巻き煙草の生産で財をなした実業家、村井吉兵衛(むらい きちべゑ)の愛娘を描いた作品。村井の援助により、高木は念願の欧米留学を果たした。美術史家の副島三喜男(そえしま みきお)は、この作品について「ロココ風の魅惑的な表現は、気品と優美さとを備えたこの婦人の人間像を的確に示すものとなっている」と評した。高木は肖像画を得意としたが、その中でもとりわけ完成度の高い作品である。

高木背水（たかぎ・はいすい、1877-1943）

佐賀市松原に生まれる。本名誠一郎。11歳で上京。1893（明治26）年頃から岡田三郎助を知り、画塾大幸館に入り本格的に洋画家を志す。苦学を重ねながらアメリカ・イギリスでも学んだ。また、日本統治時代の朝鮮にも暮らし、現地の美術の振興に尽力した。デッサンの名手であり、『明治天皇像』、『鍋島直大侯像』（ともに佐嘉神社蔵）など優れた肖像画が残されている。

13 洋装の女

Woman Wearing
Western Clothes

中沢弘光

1940（昭和15）頃

98.5×33.4

油彩・カンヴァス

館蔵

布と肌の色彩のハーモニー

中沢66歳頃の作品。1932（昭和12）年に帝国芸術院会員となり、本作でもその円熟した画技を発揮している。女性の肌や薄いワンピースの布面に塗り込められた様々な色が繊細な絵肌を生んでおり、腕から下げられた布の荒いタッチや鮮やかな色彩と好対照をなしている。中沢は明るい肌色の健康的な女性像を得意としており、本作は彼の特色をよく示す一作である。

中沢弘光（なかざわ・ひろみつ、1874-1964）

東京に生まれる。1887（明治20）年、曾山幸彦^{そやま さちひこ}の画塾で洋画を学び始め、岡田三郎助と出会う。その後も共に黒田清輝らの天真道場で学び、また白馬会創立にも参加するなど、両者の親交は長く続いた。1907（明治40）年、東京勸業博覧会で一等賞牌を受賞。とりわけ京都の舞妓を好んで画題とし「舞妓の画家」とも称された。本の装丁なども手掛けており、デザイナーとしての顔も持つ。

14 黒衣の婦人

Woman with
Black Dress

御厨純一

1926～28
（大正15～昭和3）

65.0×50.5

油彩・カンヴァス

館蔵

気品ある滞欧期の婦人像

御厨は確かなデッサン力と力強い描写で、人物を生き活きと、量感豊かに描くことを得意とした。本作は御厨がフランス滞在中に描いた唯一の婦人像と言われる。ずっと背を伸ばした女性は物思いにふけるような表情を浮かべる。外を見つめる瞳は、彼女の視線の先に広がる空間を感じさせるようだ。彼女の黒い洋服が肌の色を引き締め、差し込む光の効果を際立たせている。

御厨純一（みくりや・じゅんいち、1887-1948）

佐賀市高木町に生まれる。1897（明治30）年上京、白馬会第二研究所を経て東京美術学校で学ぶ。同校の卒業生と「四十年会」などの洋画の親睦団体を立ち上げる。1926（大正15）年、フランスに留学、ヨーロッパを周遊して現地の風景などを描いた。戦時中は海軍従軍画家として多くの戦争画を残した。力強い線と量感豊かな描写に特色がある。

15 緑の庭

Green Garden

山口亮一

1926（大正15）

162.1×97.0

油彩・カンヴァス

館蔵

四季折々の自然のなかで句作を楽しむ

山口邸には梅・桜・柿などが茂る豊かな日本庭園があり、夫妻はここで俳句を楽しんだ。本作はその庭で句作をするスガ夫人をとらえたもの。山口は特に彼女の手の形にこだわり、何度も下描きを重ねたという。人物の後方に大きく余白を取り、考え込む夫人の思いまでも描き出すかのようである。同年の第7回帝展出品作。

山口亮一（やまぐち・りょういち、1880-1967）

佐賀市に生まれる。東京美術学校を首席で卒業したのち、1911(明治44)年に佐賀へ帰郷。岡田三郎助、久米桂一郎らの協力を得て、佐賀美術協会創立の際には会長に就任した。1921(大正10)年から退職まで佐賀師範学校で洋画を教え、また佐賀洋画研究所などの画塾も主宰。生涯を通じて佐賀の芸術文化の発展と後進の育成に務めた。句作や陶器の絵付け、写真なども嗜む多才な人物でもあった。

16 パリの踊り子

Dancer in Paris

北島浅一

1922(大正11)

119.5×101.0

油彩・カンヴァス

館蔵

モデルの素顔に光を当てた代表作

パリ・ビアンクールのアトリエで、踊り子のロレッチャという女性をモデルに描いた作品。彼女の表情は疲れたようにも見え、少々退廃的な日常の表情を感じることができる。このような室内でくつろぐ女性を、北島はしばしば親しみを持って描いた。彼が得意とした素早い筆致や人物の洒脱な描写はこのフランス滞在期に磨かれたもので、本作は留学の総仕上げともいえる力作である。

北島浅一（きたじま・あさいち、1887-1948）

小城市に生まれる。本名の「朝一」は、朝一番に生まれたことに由来する。白馬会第二研究所を経て東京美術学校へ入学。同校では御厨純一や萬鉄五郎が同期であった。1919(大正8)年から3年間フランスに留学、アカデミー・コラロッシに学ぶ。1921(大正10)年、《踊り場》がサロン・ドートンヌに入選。帰国後は帝展・文展を中心に活躍する。

17 裸婦

Nude

藤島武二

大正時代

60.4×50.0

油彩・カンヴァス

館蔵

パレットナイフを使った、実験意欲旺盛な作品

絵具が面的に配置された女性の肌は、パレットナイフを使った素早いタッチで描かれている。一見荒々しい画面だが、女性の力強さをよく捉えている。また、女性の髪などに使われた黒い絵具も、上気したような肌の紅色を巧みに引き立たせている。藤島のこのような実験的な筆触は、《イタリアの海》(石橋財団石橋美術館蔵)など、明治後期のヨーロッパ留学時代の作例にも見出すことができる。

藤島武二(ふじしま・たけじ、1867~1943)

岡田三郎助とともに日本の近代洋画壇で大きな存在感を発揮した画家。東京美術学校の西洋画科新設の際には岡田とともに助教授となり、のち共同で本郷洋画研究所を設立。さらに第1回の文化勲章とともに受章し、二人は「画壇の双璧」とも呼ばれた。岡田への追悼文では「上品さが何を描いてもついて廻つてゐた」と岡田の作品を評しつつ、その人柄を「非常に我の強い人」とも称しており、外柔内剛とも称された岡田のひととなりを知悉していた様子がうかがえる。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail. hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>